

| | |
|--------------|---|
| Title | 行為の解釈について |
| Author(s) | 菅野, 盾樹 |
| Citation | 大阪大学人間科学部紀要. 1986, 12, p. 155-168 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/12543 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

行為の解釈について

菅 野 盾 樹

行為の解釈について

1. 行為の同定

異文化の地にでかけた人類学者は、当地の人々がさまざまにふるまうのを目撃するとき、彼らがいったい何をしているのか、つきとめたいと欲する。この当然の欲求は、すこし形はちがうが、古人の業績を残された文献から読み取ろうとする歴史学者の場合や、平常、他人のなす振りをみてその真意をつかみかねているわれわれが抱くものと、ほとんど同じだろう。

(ちなみに、人がまさになしつつある行為が何であるかのつきとめ、すなわち行為の同定は、当人の信念を知るうえで欠かすことができない手続きだ。この菓子が毒入りだと信じている人物は、なにか訳がないかぎりそれを贈り物にしないでだろうし、反対に平気でそれを人の贈り物にする人物は、さだめし菓子が無毒だと信じているに違いない。)

欲求はやすやすと満たされるとはかぎらない。というのも、表立って感知される行動は問題の行為に直結してはいないからである。たとえば、「ペン」と名づけられた用具を手にとり、それを紙のうえで操作する行動を考えてみよ。人物、かれが身を置く背景、まわりの小道具など、主体とその文脈に応じ、それはさまざまな行為の素材に使用されるだろう。

その行動は契約書に署名すること、つまり契約かもしれないし、詩作かもしれない。あるいはたんにイタズラ書きをしているのかもしれない。こうした三つの行為において、同一の行動がまぎぞえにされているからといって、それぞれの行為までもが同じだとはいえない。反対に、たとえ行動としてはまったく似てはいない二つの出来事が、しかし行為としてはおなじ素性のものであることは、よくあることだ。たとえば、詩作にあたってペンを走らせるその速度は、天啓によって一気呵成に作品をものすというタイプの詩人の場合と、書いては消し消しては書きながら、呻吟のすえようやく作品を仕上げるといった詩人とは、その開きはひどく大きいだろうし、右利きの詩人と左利きの詩人が行う行動は、見た目にはいちぢるしい差異を示している。しかし、どちらも詩を作るやりかたなのである。

行為の同定に必要な条件にはさまざまなものが数えられよう。その一つを手掛かりに、行為の解釈というわれわれの主題を調べてみたい。

行為をしかじかのものとして同定するためには、行為がそのもとなされる社会集団に、行為を分類するために一揃いの記述(ラベル)の貯えが共有されていなければならない。

重大な訴訟事件で働きずめの弁護士が、仕事場で前後不覚に居眠りをはじめ、そのあいだ

にも手が無意識にワープロを操作して専門用語の多用された一件書類を作ってしまったでしょう。われわれはたぶん、「彼は眠りながら書類を書いた」とあきれていうだろう。一方、法律には皆目無知な人間——弁護士の娘の幼稚園児——が眠り込んでやはり道具をいじってあの書類とおなじパターンをつくりだしたとする。しかし、われわれはその児が眠りながら書類を書いたとは言いそうもない。

この差は次に由来する。「書類作り」という記述が、弁護士の属する集団——ここには依頼人や判事なども含まれている——には備わるものの、幼稚園児の集団には無縁なのである。記述が集団の共有であるということは、当然、行為の主もまた適切な記述を保有していることを意味する。己れの行為を「書類を書く」こととして描写できない弁護士は、一件書類を作成することは不可能である。

寝込みながら書類作りに励んだ弁護士の例は、ばかげてはいるが必ずしもありえぬことではない（夢のなかで問題を解いた数学者の話はよく知られている）。これは何を示しているか。行為の主が現に適切な記述を所有していない場合でも、人に言われてあらためて己れの行為をそのようなものとして肯定できるなら、彼が当の行為をなしたと、十分に言うことができるのである。

別の例をとろう。わたしが何気無くしてかしたことが、犯罪にあたるとして起訴されたとする。わたしの持つ記述の貯えには、わたしの行為を「犯罪」と呼ばせるものはなにもなかったのだ。しかし、わたしの必死の抗弁はついに聞きいれられないだろう。知らなかったではすまない、と世間は言うだろう。もしわたしの行いが、たしかに、法律が規定する犯罪の要件を構成すると、わたし自身納得しえたなら、不承不承であれなんであれそれが「犯罪」に相違ないことをわたしは知るだろう。わたしの行為を同定するのは、現にわたしが持つ記述ではなく、たんにわたしが持ちうる——自分で気がついてもいいし、人に教えられてもいい——行為の記述なのだ。

2. 行為の記述

人類学者が彼の調査地でつねにころがけるべき研究上の方針が、以上のことから導き出される。かの地の人々が何をしているのかをノートに記すさい、彼らが自分たちの行為について理解しているもの、言い換えれば、彼らが行為について持つ記述、あるいは「観念」を歪めたり潤色したりせず、そのままキャッチしなくてはならないのだ。これは当然のことだろう。ウィンチがこの点の強調に努めたのは正しい⁹⁾。しかし、問題はむしろこの先に横たわっているのであって、この点の確認は研究のほんの始まりを告げるにすぎない。

第一に、ここには行為と意図ないしは動機の関係という、行為理論一般にとっての問題が

ある。さきに述べたような意味で、行為の主体が自分のおこなったことの記述を自由にできることを「行為の自己記述性」と呼ぼう。この可能性が本人に自覚されていない場合もありうる。眠りながら書類を書きあげた弁護士はその一例であるし、犯罪を知らずに行ったわたしは他の例である。

問題をかもすのは、行為の自己記述性が本人に気がつかれないばかりか、それが自分に帰せられることに彼が抵抗する場合、言い換えればいわゆる無意識の意図が介入する場合である。われわれはこうした概念を取り入れることのできる理論的枠組みを用意すべきだろう⁴⁾。

第二に、行為の自己記述性は必ずしもつねに行為の一義的な同定を保証しないことが留意されねばならない。これにはいろいろな場合がある。いましがた述べた無意識的な行為の事例は、そのめざましい場合だろう。熱心な宗教活動のかけに、じつは現実からの逃避が、その真の動機として隠されている場合がある。しかし、もっとありきたりなのは記述が曖昧な場合、多義的な場合、最後に、不確定な場合である。この三者は意識的・無意識的の、二つの様態を取りうるから、研究者はつごう六種の自己記述性にかかわることになる。しばらく様態の区別は度外視して、各種の自己記述性について見ることにしよう。

記述が曖昧な場合。弁護のために書類を書くこと、コンピュータのプログラムを組むこと、これこれの契約を取り交すこと、会議に遅刻した言い訳をすること、これらの行為の記述には曖昧なところがほとんどない。しかし、ゲームにあたるかどうか判然しない行動がある。また、宗教、遊び、労働などといった大きな範疇になると、絶望的に曖昧である。役所の建て替えにさいして神主におはらいをさせることは、宗教行為にあたるのだろうか。アザンデ族が目に見えない霊によって自然現象を説明するのは、やはり、科学的説明の一種なのか⁵⁾。ここにはずっと細かな記述とごく大きなそれとの例だけをあげたが、もちろん中間の記述で曖昧なものも、けっして少なくはない。

行為が多義的な場合。この点は従来それほど強調されてこなかったが、日常の行為のほとんどが、どこか曖昧であると同時に多少とも多義的なのである。行為がいわばいくつもの顔を示し、笑うかとおもえば泣いているようでもあるといった浮薄さを捨て去り、生真面目に一つの顔つきをして見せるのは、非日常的な差し迫った行為の場面である。たとえば、おまえは我に敵するのか味方するのか、どちらなのかという糾問に、もはや行為の主は、責任を軽くする多義性にたわむれてはいられないのだ。

残りは、記述が不確定な場合である。それに言及するまえに、すでに述べた二つの場合がいわば実在論の範囲を動いていること、しかし第三の場合は非実在論的な要素が介入する点をあらかじめ指摘しておきたい。ことからの仔細は次節以下で明示されるだろう。

行為の意味が曖昧であろうと多義的であろうと、それはすでに出来上がった分類体系のうえに描かれるかたちでしかない。さまざまな行動を材料に行為を組み立てる概念組織がすで

に稼働している。いわばキャンパスや絵筆は揃っているし、遠近法と色を加える方式もすでに習得済みで、それはいま使われるばかりになっている。あとは絵の具を画布のうえに置いてゆくだけなのだ。これにたいして、第三の場合は、どのような描き方をするか、それを選択することからはじめねばならない。ここではわれわれは非実在論的な要素に幾分かかわることになる。というのは、実があつてただ名のない行為に、それをふさわしい範疇をあたえることでは不十分なのであつて、実のない行為にまさに実を盛り込まねばならないからである。

各種の自己記述性につき、もう一点述べておかななくてはならない。行為の記述がこれらの形態のどれをとるにせよ、それが生起する現場へ外部からやってくる者と、内部の者と、この双方にとり自己記述性は対称性を保つのである。つまり、行為の主にとっての行為の意味と、研究者にとってのそれとはまったく同等であるということだ。これがありそうもない話だと言う向きは、体験と体験の理解とを混同しているのである。だれも他人の体験を肩代わりできないけれども、その意味とはといえば、およそそれが「意味」とよばれるものなら、はじめから公共的な在り方しかとりえないのである。ただし、原住民が彼の行為を理解する域に、外来者がいつでも達することができるか、といえば、これはまた別の話である。あとでも触れるように、たいいていの場合、研究者の現地語にかんする知識は不十分だし、その他のデータも不足していることが多い。これは意味理解を妨げる事実上の困難である。しかし、これを言うなら、実は、内部の者でさえつねに十分な言語知識と十分な文脈にかんする知識を持っているとはかぎらない。ある個人にとり、自分の行ったことが社会に保有された記述の貯えとの照合によって、どのような行為として妥当するか、この点が明確でない場合がある。自らの不明で罪を問われたわたしは、その見やすい一例である⁶⁾。

3. 記述の不確定性

原住民がおこなう一連の発言や身振りなどをとりまとめて、しかじかの行為として同定するのに、あと一步の距離を残してついにそれを達成しえないことがおこる。その原因としてはまず、同定に必要な十分な手段を研究者が手にいれていないことが考えられる。なにしろ彼はよそのものだし、最近そこへやってきた、いわば文化の半可通なのであるから。現地のことばの知識が不足していることがあるかもしれない。さらに、非言語的な、事実にかんする彼の知識も足りないのかもしれない。

この不足はたんに事実上のものにすぎないが、しかし永く埋められることがないだろう。この意味でこの欠陥はいわば事実必然的である。なるほど言語は、個人がそれを話すのであり、誰も話さない言語とは国民のいない国家同然、ただ名のみ存在にすぎない。あるいは、

それは誰によっても演じられない劇のようなものだ。しかし反面、言語は個人を超えている。個人の発語行為は超個人的な規則によって制約されているし、ひとが言語について有する知識は探究をつうじてすこしづつしか外に引き出されない。だからこそ、話す主体にとって、ある語法が誤用なのかどうか、自身の知識に照らし合わせてきめようと、彼が無駄な試みを繰り返すようなことも起こるのだ。事実の必然性はここで言語の原理と結びつく。彼の言語知識の事実上の不足は、彼が理想的な話し手であったとしても、ある水準以上には決して補われることがないだろう。生きた言語は、個別の話し方についてその文法的適格・非適格をあらかじめ決められないという、非決定性の領域をそなえている。言語が有限の語や形態素をやりくりしながら新たな表現を成し遂げてゆけるのは、言語がはらんだ非決定性のおかげなのである。

言語外の知識についても、その持ち主が外来者と内部の者とを問わず、つねに不足しがちである。たとえば、今日でも親子して七夕に笹のかざりものを軒先にたてる風習が残っている。われわれにはなぜこのようなことをするのか、きっと過去のある時期に始められた習わしに違いないのだが、その「ほんとうの」意味がもう薄れてしまっている。現在ここで行われている行為は、あらたに創発されたものを除いて、空間と時間とを越えて伝承されたものばかりである。この距離が行為の意味を磨滅させるのだ。

こうして、研究者にとっても原住民にとっても、彼がその理解を目指して行為に面とむかうとき、目のあたりにするのは本質的に断片的なデータと欠如した知識である。これらを駆使しながら、彼はつぎつぎと表現=理解へと身を賭す。彼が実際に行うのは、意図の無媒介な表出とか、そこで繰り広げられた表現をそのまま攬むことなどではない。この場に「所与」は存在していない。総合、これこそ彼が行うものなのだ。では、言うところの総合は具体的にどのようなにされるのか。これについての人類学者スペルベルの観察を、節を改めてわれわれとしてもふりかえてみたい。

4. 民族誌における総合

民族誌の著述は、研究者の報告、理論の断片、個人的感慨の吐露などのごたごたからなる。問題は、彼が「生の事実」として記載するものが——スペルベルは民族誌のこの部分を「挿話」と呼ぶ——彼の分析によると、記述と引用の組み合わせから出来上がっている点である⁷⁾。次の例はエヴァンズ=ブリチャードの名高いヌエル族にかんする著作からとられたものだ。

挿話 頻繁に供犠するというので家族や親族から無言の批難をうけていたヌエルの男が抗弁

する場に私は居合わせた。彼には、自分が法外な肉好きだから家畜をつぶしているのだと皆に思われているのが、前からわかっていた。これは真実ではない、と彼は言った。(…)彼が家畜をつぶしたと家族が言うのはよいが、自分は彼らのために牛を殺したのだ。それは〈コケネ・イーエキエン・ケ・ヤン〉つまり〈牛をもってする彼らの生命の贖い (ransom)〉だった。彼は家族のなかに重い病人がでた例を逐一教えあげ、そのたびに精霊デンをなだめるため供儀した雄牛を描写しながら、何度となくこの句を口にした。

スペルベルの指摘する第一点は、「無言の批難」が観察されるというより推量されるものであることをはじめとして、ここに確言された「事実」の類はみな、複数の、しばしば曖昧だったり多義的だったりする、複雑な行動の描写を前提に含む言明の集団から演繹されたのにすぎないということである。この制約は研究者とヌエル族とに差別なく課せられている。

第二点は、その他の部分が引用からなっていることだ。正確に言うと、現地語の引き写しは別として、それは土地の人々の手助けで研究者が理解し、要約し、翻訳した内容の、間接文体ならびに自由間接文体をとった報告にほかならない⁸⁾。

民族誌はこうした挿話に加えて、「解説」ならびに「一般化」とよぶべき部面を伴っている。解説とは、研究対象の文化に固有な用語に、研究者が直観にみちびかれて説明を与える部分のことである。たとえば、エヴァンズ=プリチャードはヌエル族の〈クク〉という語についてあらかし次のような解説を施している。このことばには、〈買う〉と〈売る〉の両方の意味が含まれるが、たんに世俗的な交換の観念のみならず、宗教的な意味をもこの語で言い表す点で、それは英語の ransom (日本語なら「贖い」)などの語に似ている、と。この種の解説はきわめて直観的である。つまり、ヌエル族の用語に正確に対応する訳語が研究者の言語にはないのだし(英語でものさした数学論文のなかの irrational number という語は、日本語の翻訳中で「無理数」という対応物をもつことと比較せよ)、それゆえ、挿話のなかにも使われた「贖い」(ransom)といった言い回しは、研究者が〈クク〉について理解するところを読者にいきいきと伝達するための特別仕立ての語、すなわち「解釈用語」にすぎないのである。

一般化とは、挿話と解説とを下敷きに作られた全称命題のことをいう。エヴァンズ=プリチャードは〈クク〉に密接に関連する〈クク・クウォス〉という供儀について次のような一般化を行った。それは、神をして贈り主を保護する義務を負わせるためになされる、神にたいする贈与なのだ。この種の供儀によって人間は神と取り引きするのである、と。もちろんこうした一般化は、自然科学の法則などとは違いひどく曖昧な性格をしている。初期条件を与えれば法則から個別事象が演繹されるのにひきかえ、一般化から挿話を抽きだすことはおぼつかぬことだ。では、それは何をおこなっているのか。一般化は挿話と解説のある種の延

長にすぎない。解釈こそその任務なのである。

要するに、民族誌が実際に遂行している概念作用とは解釈であり（もちろんそれだけではないが）、これこそわれわれの言う総合にはかならない。解釈とは、研究者の現実の把握を読者に共有してもらうために、どうしても敷設せざるをえない現実への通路なのだ。ただし留意すべきは、この通路の果てにはどのような到達地点もあらかじめ待ち構えてはいないという点である。事象の意味、行為、世界、これらはいずれも所与ではない。解釈は、この点で、自他による理解を目的として形成される表象、言い換えれば思考を伝達することの有効性に制約された表象にはかならないし、また他面では、それは対象の意味と概念にかかわる、それ自体概念的事象であり、どこまでも物事の意味に忠実であれという要請に従うべきものだ。このように、解釈は所与をたんに受け入れる受け身の働きではありえない。研究者が耳に聞き、目に見たものを素材にして、彼の直面する現実をある首尾をとげた一続きのもの、しかしかのものとして掴むことに、解釈の能動的な働きがある。

エヴァンズ=プリチャードが「供儀によって人間は神とある種の取り引きをする」と簡単に言っただけのとき、かれは実に多種多様なデータ——人々の談話、決まり文句、情報提供者の注釈や説明、それから彼が独自に演繹した言外の意味、前提、仮設など——を総合しているのである（つけ加えるなら、これらのデータがすでに総合の所産なのだ）。

5. 解釈の意義

「総合としての解釈」という論点をめぐって、ありうる誤解や問題点をここで解消しておきたい。

うえで何度か指摘してきたように、行為の探究をとりまく理論的状況は外来者にとっても土地の人間にとっても差別がない。（ただし、体験にかんしてそこに非対称性が横たわっているのは当然のことである。）研究者が総合を行うというのなら、原住民もまたおなじである。家族から批難をこうむったあのヌエルの男は「自分は法外な肉好きだから頻りに家畜をつぶすのだ、と家族から思われている」と口にするが、これは家族たちのことばや振舞いから彼自身が総合して引き出した一つの結論にはかならない。

ウィンチが指摘するように、行為は「観念」に媒介されているのであって、研究者はこの観念を歪めたり無視したりは許されない。しかし、彼の論調にはあたかも観念が所与であるかのような響きがある。実のところ、それはあるのではなくて、成るのであり総合されるのだ。あるいは、それはあらかじめ確定してはいないのであって、いくぶんか不確定な、非実在論的な要素をはらんでいるのである。それゆえ、そこへやってきた研究者が原住民と交際を保つことによって、原住民の現実に新たに追加される次元や成分がある。ふつうよく言わ

れるように、社会科学が自然科学と異なる点はこちらにかかわる。しかし、それは対象への接近が対象の在り方を変えてしまうことを言うのではない。自然科学にもこうした事情はつきまとう。たとえば生体の器官を調べようとしてレントゲン光線を照射しすぎれば、器官は変質してしまうだろう。問題は、社会科学の場合、人の相互行為が対象を規定するという点である。原住民のあいだに営まれる相互行為に外来者が参加して、それに輻湊の様相を付け加えることがあるだろう。なぜなら、彼もことばや行為によって人々と交わる同じ人間なのだから。

もちろん、研究者の解釈が正しいというアプリオリな保証はない。言い換えれば、彼の理解が原住民のそれと合致しているかどうか、これはよくよく調べてみなければ確認しえないことである。多くの民族誌は、おそらくこの点の調べにかんしあまりにも性急ではないだろうか。自分たちについて外来者の観察が、しばしば自分たちにはじっくりこないと彼らの不平は、解釈の難しさをよく物語っている¹⁰⁾。しかしどんなに細心に調査に努めたとしても、どうしても越えられない限界が、理想的な理解のまえには横たわっている。さきにも触れたように、研究者にはつねに事実上の知的制約が課せられているからだ。が、いま一度繰り返さねばならない。この制約は原住民にとって無縁どころか、ひとしく彼らの蒙る条件なのだ。理想的な理解をリアルなものとしては放逐しよう。それと共に、理想的な理解を享受する理想的な原住民も追い払われるだろう。近年の、異文化理解にかんする論争、とくにウィッチを主だった当事者の一人とする、相対主義をめぐる議論はこのような現実離れをした虚構をめぐる行われていた節がある。

文化理解を志す者にはいかなる特権もないし、本質的な無資格者もない。しかし、これはどのような解釈でもかまわない、といった解釈的アナーキズムをいうのでは決してないのである。もとより当該文化内部の成員が何をいわんとしているのかに最大の敬意が払われるべきだ。この敬意が、彼らが表立って思ってもみなかった事実を暴露する結果に終わることがあるかもしれない。しかし、これは敬意を最後まで貫くひとつのやり方にほかならないのだ。もちろん結果として示されたものが正しいかどうかは、しかるべき基準に照らして評価されねばならない。(解釈の「正しさ」についてここで詳説する余裕がないのは残念である。)

このことは次を意味している。研究者は、マッキンティアの指摘するように、自分が調べている人々と分けもっていない概念なり意味なりを表立って理解しうるのであり、その理解を研究の当然の目的となしうるのだ¹¹⁾。実際、行為を理解することは必ずしも行為の意味を分有することではない。たとえば、ヌエル族が行う儀礼〈クク・クウォス〉の意味を明らかにすることは、研究者がヌエル族の神を信じ、なされた儀礼が現実には有効であると考えたことを意味しない。ある行為を理解することは、それをみずから行うことではないのはもとより、それに信憑を寄せることでもない。一般に、ある対象の理解は必ずしも対象へ同化する

ことではないのである。

対象との同化という要求は、研究の目的としては二重に不適切である。それは研究者が原住民になりきるといふ、あまりにも過大で誇張された要求にすぎない。r と l の発音上の区別がきわめて不得手なわれわれが、その他の点でどんなに巧みに英語を話すことができたとしても、英語を母語としている人のようにはついに成れないのだ。しかし、〈原住民になりきる〉という言い方にはどこか奇妙な響きがある。原住民はたしかに存在する。けれども、〈真の原住民〉などというのは偽りの概念にすぎない。存在するのは、あるスタイルをそなえた文化と言語を巧みに（あるいは不器用に）担う個々の人々にほかならない。またそうした要求は研究のいわば自殺行為にもたとえられよう。当該文化へほんとうに浸りきってしまったとき、研究者の問題は同時に消えている筈である。逆に、もし原住民自身が自分の生きてきた文化に問題を抱いた暁には、彼は多かれ少なかれ自己の文化を研究者のまなざしで眺めはじめたのである。

ウィンチはこの点にかんして誤解を招きやすい言い方をした点で批判されるべきだ。彼に言わせると、原住民の「生活形式」を分け持つことにこそ理解が成り立つという¹²⁾。たとえば、エヴァンス=プリチャードが調査したザンデ族の生活では、穀物の実りに多大の重要性が置かれている。豊かな実りのためにさまざまなてだてが計られ、呪術もその延長上にある。すなわち、彼らの呪術は西欧人の科学技術の代替物などではなく、重要な生活上のテーマにに応じて決着をつける (terms with its importance) やりかたなのである、という。ウィンチの解釈学的見地は、研究の発端を正しく築くべきだという要請としては妥当なものである。しかしここには研究の到達地点は示されていない。研究とは、理解へ赴く求心的運動ではなくて、むしろそこから出立する遠心的運動にほかならない。かりに生活形式の把握ということが、研究者自らが自身の生活をその形式によって律した彩ることを意味するなら、うえに述べたように、研究は遂に開始をみないか、またはもう終わっているか、どちらかだろう。

さらに先に進むまえに、われわれの見地について最後の注釈を施しておきたい。行為の同定には本質的な不確定性が伴うことをわれわれは指摘した。事象の意味を理解する企ては、つねになんらかの非実在論的な要素に直面せざるをえない。理解の表現形式である解釈が、しばしば創作になぞらえられるのは理由がある。解釈とは自由に使うことができる材料をもちいて、世界という作品を創りあげることだ。このような見方は異文化や歴史の客観的な認識を不可能にする恐れはないだろうか。これは社会科学の探究を小説の執筆のような、きわめて主観的で、厳正な科学的基準の欠けた活動と取り違えているのではないのか。

こうした疑問にもかかわらず、われわれの見地が決して探究を危うくしないことを断言しよう。科学とは何かの問いは別の機会に取り上げるほかはないが、この場で一言申し添えるなら、科学（とりわけ人文・社会科学）が、芸術と大幅に重なり合う人間の活動形態である

点は疑いをいれない。とくに理解と解釈が科学の不可避の部面であるかぎり、そこでは科学は芸術とよりふたつの営みを繰り広げている¹³⁾。

ただし、繰り返すことになるが、意味や世界へと求心的に動く、任意の理解と解釈がすべて妥当性を伴うわけではない。すぐれた絵画が世界の姿についてあらたに何事かを開示し教えてくれるのにひきかえ、凡庸な絵画がその無意義さでわれわれを退屈させるように、解釈にはその優劣があり、解釈者は容易ではない真理への戦いをどこまでも戦い抜かねばならないのだ。

〔註〕

- 1) 文化人類学者ギアツは行動とは区別された、意味を担った行為の記述、すなわち哲学者ライルの言う「濃厚な記述」(thick description)を民族誌の任務とただしく捉えている。ただし、民族誌が人類学とどう違うのかについて、明晰な説明が彼にはない。Geertz, C.: *The Interpretation of Cultures*, 1973, chapter 1 参照。
社会科学方法論からする行為と信念の関係の概観は、MaCintyre, A.: 'A Mistake about causality in the social science' in Laslett, P. et al. eds., *Philosophy, Politics and Society*, 1972を見よ。
- 2) MaCintyre, A. *op. cit.*
- 3) Winch, P.: *The Idea of Social Science*, 1958 ならびに大きな波紋を投げた論考 'Understanding a primitive society' in Wilson, B. R. ed., *Rationality*, 1970 参照。
- 4) ウィンチの枠組みはこの点でマッキンタイアのそれに劣っていると云わざるを得ない。MaCintyre, A.: 'The idea of a social science' in Wilson, B. R. ed., *Rationality*, 1970 参照。
- 5) 伝統的・宗教的思考が科学に遜色ない「説明」の一形態であると一貫して主張しているのは、ロビン・ホートンである。たとえば次を見よ。Horton, R.: 'African traditional thought and western science' in Wilson, B. R. ed., *Rationality*, 1970. この問題は別の機会にとりあげたい。
- 6) いくつかの点で意見を異にするウィンチとマッキンタイアとは自己記述の非対称性と記述されるものの確定とを主張する点で、手を携えているように見える。たとえばマッキンタイアは「異文化に属する人の自己記述に体现された基準を掴むまでは、研究者はなにひとつ語ってはならぬ」と言うが、これはいささか強すぎる制約だろう。MaCintyre, A.: 'The idea of a social science' in Wilson, B. R. ed., *Rationality*, 1970, p. 130 参照。
- 7) スペルベル「解釈民族誌と理論人類学」、『人類学とはなにか』(菅野盾樹訳), 1984, 紀伊國屋書店 所収。
- 8) 間接文体の理論構成にとっての意義にはもっと注意が払われるべきだ。スペルベル, 前掲論文 p. 40-47 を見よ。
- 9) 解釈に関する基本的考察、とくにそのコスモロジカルな含意について次を見よ。菅野盾樹「解釈の二義性——科学の神話学にむけて」、『思想』1973年3月号 所収。
- 10) その身近な一例は、ベネディクトの名高い『菊と刀』を読んでわれわれ自身が抱く感情である。
- 11) MaCintyre, A.: 'Is Understanding Religion Compatible with Believing?' in Wilson, B. R. ed., *Rationality*, 1970 参照。
- 12) 彼の論考 'Understanding a primitive society' in Wilson, B. R. ed., *Rationality*, 1970 参照。
- 13) Goodman, N.: *Ways of Worldmaking*, 1978 参照。芸術の認識的価値については次を見よ。菅野盾樹「芸術と記号作用」、『文化のダイナミックス』(新・岩波講座・哲学第12巻), 1986 所収。

INTERPRETING ACTIONS

TATEKI SUGENO

A researcher in the field of human sciences including cultural anthropology and history always tries to interpret other's actions. He, however, sometimes fails to do this work. How can he succeed in interpreting actions?

In order that he may identify other's actions, he should utilize the sock of descriptions for classifying actions that is held by the social group to which other belongs.

It is researcher's duty to be faithful to the description which the person researched by him ascribes to himself. This is a matter of course.

It should be noted that the description is not always univocal. It may be unconsciously distorted by the subject (religious enthusiasm may turn to be escape from actual life), vague in definition (it is very difficult to define precisely categories such as religion, play, and labour), or ambiguous (e.g. what psychologists call ambivalence). These cases make no problem. But with another case that actor's self-description is indeterminable, a serious problem comes out.

Then the researcher gets out of the realistic commonplace world to get into the non-realistic domain. He should do 'synthesizing' in Sperbers's sense various data such as native's words, gestures, documents, etc. because data are in principle and virtually insufficient for descriptive determination. As for native's language, even the most competent researcher cannot master it completely. In the symmetrical way, a native himself as a speaking subject cannot but be a more or less awkward speaker of the language.

Quine said that there is no 'correct translation' or rather that to say such phrase is to say a nonsense. This is his well-known Indeterminacy Thesis. We will say as a variation of the thesis that a interpreter of other culture must synthesyze data and intepretation is nothing but synthesyzing. He, as it were, remakes a world using dispoible material in the field.

We would like to make some comments on our standpoint so that possible misunderstanding may be avoided.

1) With regard to indeterminacy of description the researcher and the native are in the equal condition while they are, needless to say, unequal in respect to experience as such. This means that the 'understanding' or 'idea' which the native has about his own action cannot be called the 'given' (pace Winch) and it has only the title of the synthesized to both of them.

2) We have always alternative versions of synthesizing and it is nonsense to

talk about 'the one correct synthesis'. Nonetheless anarchism in interpretation cannot be adopted because it neglects the distinction between a good interpretation and a bad one. As a well painted picture makes us discover the relevant aspect of the world while clumsy one bores us, so there is a-symmetry between two kinds of interpretation.

3) If interpretation can be compared properly with activities in art, does scientific knowledge about other's action become impossible? As a replay, we would say that the contrast as is commonly said between science and art is basically wrong. Both science and art are two main forms of human epistemic activities.